

山本幸男著

『奈良朝仏教史攷』

大 哉 啓

まず、本書の構成を以下に掲げる（凡例・あとがき・索引は省略）。

本書は、著者の第一論文集である『写經所文書の基礎的研究』（吉川弘文館、二〇〇二年、以下前著）に次いで刊行された第二論文集である。著者の研究領域は多岐にわたるが、

主に奈良時代の政治史・仏教史に関する業績に特化し、わけても正倉院文書を活用した成果は著者の業績の大きな柱となつてゐる。それらのうち、正倉院文書を本格的に扱った論文集が前著であるが、本書では正倉院文書から抽出される新たな事実に加え、『延暦僧録』逸文など奈良時代の仏教事情を伝える史料を多く活用し、かつ仏教学の成果を充分に援用しながら、多様な仏教信仰のあり様や教學面・実践面での具体像を解説しようとする。

序章 本書の構成と梗概

I 「華嚴經」と学僧

第一章 天平十二年の『華嚴經』講説——金鐘寺・元興寺・大安寺をめぐる人々

第二章 『華嚴經』講説を支えた学僧たち——正倉院文書からみた天平十六年の様相——

第三章 東大寺華嚴宗の教學と実践——天平勝宝三年の『草疏目録』を通して——

付論1 華嚴宗関係草疏目録——勝宝録・円超録を中心

に——

第四章 慈訓と内裏——「花巻講師」の役割をめぐつて

II 政治と仏教

第五章 天平宝字二年の『金剛般若經』書写——入唐廻使と唐風政策の様相——

第六章 孝謙太上天皇と道鏡——正倉院文書からみた政柄分担宣言期の仏事行為——

二

付論2 法華寺と内裏——孝謙太上天皇の居所をめぐつて——

第七章 早良親王と淡海三船——奈良末期の大安寺をめぐる人々——

第八章 文室淨三の無勝淨土信仰——「沙門釈淨三菩薩伝」と「仏足石記」を通して——

第九章 道璿・鑑真と淡海三船——阿弥陀淨土信仰の内実をめぐつて——

第十章 石上宅嗣と『維摩經』——仏教、老莊思想との交渉——

第十一章 玄昉将来經典と『五月一日經』の書写

序章及びあとがきによると、収録された論考はここ十五年

余りの間に書きためたもので、著者の折々の関心に即して執筆・公表されたものであるという。各論を体系立てた調整はしていないとのことであるが、右に示したように三部構成にまとめられているので、最近までの著者の主な関心の所在を窺うことができる。本評では、それに即して忌憚なく卑見を述べることにしたい。

批評を加える前に、序章を除く各章の内容を大まかに紹介しておく。

第一章は、元興寺・大安寺・金鐘寺をめぐる教學研究の動向を辿り、天平十二年（七四〇）十月八日に金鐘寺で『華嚴經』講説が開始された経緯を考察する。講説の講師に大安寺僧審が指名されるまでの動きには、元興寺や大安寺における『華嚴經』研究の動靜、元興寺と藤原氏との繋がり、玄昉と道慈との微妙な関係などの諸事情が絡んでいたと想定。当初は光明子の意向に配慮した玄昉が元興寺の嚴智を招請するよう良弁に指示したとみる。玄昉と良弁は、聖武や光明子の意向に配慮しながら金鐘寺を盧舍那仏造立計画の拠点寺院として育て上げようとしたという。

第二章は、正倉院文書に残る「律論疏集伝等本収納并返送

帳」に窺える華嚴関係章疏や学僧たちの動向から、天平十六年（七四四）における「華嚴經」研究の様相を検討する。天平十五年に『華嚴經』講説の講師を務めた慈訓は、平榮・平撰といつた学僧とともに金鐘寺内に居所を持ち、華嚴関係章疏の貸借を頻繁に行っていることを確認。後に講説の複師となる標瓊も加え、平撰が運営役、会合の場が「平撰師所」、代表者が慈訓という、華嚴学の「研究会」のような集まりが天平十五年頃より始まつたと想定する。翌十六年に創設された「知識華嚴別供」は、この「研究会」を核とした勅定の研究機関であつたという。

第三章は、正倉院文書に残る天平勝宝三年（七五二）五月二十五日付「華嚴宗布施法定文案」及び「章疏目録」から、大仏開眼に至る頃の東大寺における華嚴教学研究の内実を具体化する。両史料所載の經典・章疏の傾向から、東大寺華嚴宗は法藏の華嚴教学を核に据え、その教学確立の根拠となつた如來藏思想の研究を重視する学団であつたと指摘する。実践面では、元曉の『大乘起信論』に関する著作が大きな役割を持つていたと推測。これらの章疏類は、新羅留学僧の審詳、唐僧道璿らの藏書から収集されたとみる。

付論1は、奈良・平安前期における華嚴宗の教學研究の様相を窺うこと目的として、その関係章疏類を一覧化した

それは彼の唐風趣味だけではなく、同經やその注釈書への关心が当時の文人や僧尼の間にあつたことによるるとし、大量書写の建議者として慈訓を想定する見解⁽²⁾にも留意する。

第六章は、天平宝字六年（七六二）六月から同八年九月までの政柄分担期に、孝謙・道鏡の主導で行われた仏事行為の様相とその意義を検討する。当該期の經典奉請文書群から仲麻呂の乱勃発直前の時期に多様な三昧經典が内裏に奉請されていることを確認。ほぼ同時期の『大般若經』一部の書写事業と合わせて、孝謙が般若經信奉者として三昧を実践することにより外敵から身を護ろうとしたと推測し、道鏡の密教的見を基に仏の加護を求める彼女の姿を想定する。これは、政治性を帯びた仏事行為を出家した太上天皇が行つた最初の例であるうと評価する。

付論2は、天平宝字六年五月二十三日から天平神護元年（七六五）正月において、正倉院文書に孝謙太上天皇の居所として見える「内裏」の所在について検討する。御執經所関係文書に見える「内裏」からの宣者として、道鏡や孝謙側近の尼・女官が多く見られることがから、「内裏」は法華寺内の孝謙の居所であったと結論する。

第七章は、早良親王（七五〇～七八五）の依頼で淡海三船が制作した「大安寺碑文」の分析を通して、早良の立太子前

「華嚴宗関係章疏目録」を掲示する。この表は、第三章で検討した「章疏目録」、及び円超の延喜十四年（九一四）編纂「華嚴宗章疏并因明錄」、凝然編纂「花嚴宗經論章疏目録」（鎌倉後期）をもとにしている。

第四章は、「花嚴講師」と称された慈訓と内裏との関係を考察する。「花嚴講師」は、大仏開眼会が迫る中で『華嚴經』への関心を高めた聖武太上天皇の意向により、内裏で孝謙・聖武や光明子に同經を講説し教授する役職であつたとみる。また、開眼会後の慈訓は密教的修法による呪驗力を身につけ、聖武らの看病禪師として内裏の要請に応えようとしたとも指摘。さらに、慈訓の居所の問題や則天武后的事例などをから、彼は光明子の厚い信任を受けていたことにより政権内で地位を得たとみて、藤原仲麻呂との関係を消極的に評価する。

第五章は、天平宝字二年（七五八）における二度の「金剛般若經」大量書写の政治的・思想的意義を考察する。⁽¹⁾この事業の背景として、唐の玄宗が『御注金剛般若經』を述作・頒布・石刻し、同經の功德を天下に知らしめ人心掌握を図つたことを指摘し、天平勝宝六年（七五四）帰國の入唐廻使一行がそれらの情報をもたらしたと想定。藤原仲麻呂がこれに随して光明子の延命祈願を目的に大量書写を行つたとみる。

の動向と大安寺をめぐる交流について検討する。早良は東大寺で良弁に師事した後に大安寺東院へ移住し、宝亀二年（七七一）七月末以降に、同じく天智系で大安寺での求道経験を持つ三船と知己を得たと推測。三船の外来僧や文人らとの交流の中に早良が加わることで、天智系の縁者が求心力となり大安寺の一角に交流の場が設けられ、鑑真らの影響のもとで先進的な学問や実践法が蓄積・共有されていたと想定する。

第八章は、「延暦僧錄」逸文の「沙門稱淨三菩薩伝」や薬師寺伝存「仏足石記」から窺える文室真人淨三（六九三～七七〇）の無勝淨土信仰の内実について考察する。淨三は撰論・涅槃両宗の教場である元興寺と仏跡園を保有する禅院との関係の中で、『涅槃經』を所依とする無勝淨土信仰や仏足跡への関心を高めていったとする。その内実については、『大乘起信論』に見える修行実践の方法、『涅槃經』の戒律的性格や『遺教經』などの影響を想定し、往生を遂げるための禅定や護戒といった主体的な実践修行がともなう無勝淨土信仰であったという。

第九章は、「延暦僧錄」逸文の「淡海居士伝」に見える淡海真人三船（七二二～七八五）の阿弥陀淨土信仰の内実に迫る。大安寺で三船が師事した道璿は、自らの修行の拠り所を華嚴に求め、阿弥陀淨土を蓮華藏世界への一階梯と

位置付ける智嚴による華嚴の往生義を体得したと想定。鑑真の齋戒弟子にもなった三船は、その天台的淨土信仰の影響を受けつゝも道璿から受け継いだ華嚴流を主とし、蓮華藏世界への到達を目的とした往生信仰を有したとみて、阿弥陀淨土信仰が通俗的な追善供養とは異なる次元で貴族層の間に受容されていたと指摘する。

第十章は、石上朝臣宅嗣（七二九～七八一）の仏教信仰やそれに至る事情を検討する。『延暦僧錄』逸文の「芸亭居士伝」と『続日本紀』の薨伝に見られる宅嗣の『維摩經』への傾倒は、既存の『維摩經』信仰ではなく、智顥の天台の『維摩經』理解による淨土思想が鑑真らによつてもたらされ、彼らとの交流の中でその信仰を獲得していくと想定される。また、宅嗣が老莊的風情を嗜好していた形跡から、『維摩經』理解を通じて僧肇の老莊思想に接した可能性を推測。宅嗣の芸亭院造作については、唐の詩人王維の影響とする仮説を提示する。

第十一章は、「五月一日經」書写に際して借用された玄昉所蔵經典を『開元釈教錄』入藏録と対照させた上で一覧化し、玄昉将来經典の特質と「五月一日經」の書写方針を分析する。玄昉は法相宗としての立場を尊重しつつ、小乘よりも大乗を、既将来よりも未來を優先し、帰國船の積載量や同行者の意

詳細に考究している点は、特筆に値しよう。さらに、正倉院文書中の長大な仏典目録や奉請文書群の分析から仏典の収集過程や当事者の関心の所在さらには思想・教学の傾向性を抽出している点も極めて重要な成果である。これにより、個別写経事業だけではなく、大規模な写経や蔵書などの仏典群の特質を検討することも、当時の仏教教學・信仰の様相を探る方法として有益であることが示されたといえよう。わけても第十一章は、これらの特徴をすべて満たすものとして圧巻である。

本書で扱われた主要なテーマは、その構成により三つに大別することができる。次に、この三つの主題ごとに内容を検討し、拙い批評を加える。

(1) 華嚴教学の実態

聖武朝を画期とした華嚴教学の著しい发展は、これまでにも関心が向けられてきた。⁽⁴⁾しかし本書のように、歴史学の立場から仏教学の成果を多く組み込み、各仏典の著述内容や中國での扱われ方にも深入りして教学研究の動向と内実を検討したものは、決して多くない。それに加え、学僧の動きや文章の貸借状況、書目リストの傾向性を詳細に分析するなど、正倉院文書からしか分からぬ事実を多く明らかにしている

向、唐の佛教界の実情をも考慮して仏典を入手したと推測する。「五月一日經」書写は、写経所が入藏録の分類順に借用する方針をとり、不足分は他所から借用するなどしたとし、玄昉将来經の内実に即して書写方針が決められていたことを指摘する。

三

本書の特徴は、佛教が多いに興隆した奈良時代において教育面や実践面での実態がどの程度のものであったのかを、これまでになく具体的に描き出した点にある。前著では、正倉院文書という史料の復原作業や現状の情報をできる限り詳細に整理・提示し、そこから導き出される写経所の事業運営や組織構造などの実態を具体化することに主眼があり、書名のごとく基礎的研究というに相応しいものであつた。これに対する側面からの考察を加味して、著者の豊かな想像力を存分に發揮させたものとなっている。推測に頼る部分も少なくないが、精緻な基礎作業の上に立脚し、可能な限りの情報を駆使して行論されているため、説得力も魅力もある。とくに、奈良時代の佛教は絶えず唐や新羅の影響を受けていることを重視し、仏典や学僧を分析する際に大陸での動向や研究状況を

点は卓見である。このような検討方法は、他の諸宗にも同様に教学面や実践面での傾向がつかめる可能性があり、新たな視角への指針としても大変意味がある。

ただ、政治との関係についての言及は今一つ具体性に欠けるところがある。例えば、元興寺と藤原氏や光明子との関係は、第一章で重要な論点となつてているだけに、七世紀代の同寺と王權との緊密性からも説明する必要があろうし、藤原鎌足の長男貞惠との関係にも触れるべきであると思われる。また、第四章での、華嚴学者の慈訓と藤原仲麻呂との関係に対する評価については、著者がいうように光明子との関係も踏まえて慎重に議論すべきであるが、仲麻呂政權確立後の慈訓の動向は仲麻呂との関係で捉えた方がむしろ自然ではないか。両者の関係に対する消極的評価はあくまで慈訓が少僧都として活躍する契機のみにとどめておくべきであろう。

華嚴学の内実・動向に関する著者の主張は種々あるが、その中でも『華嚴經』の『研究会』なるものの存在は、中核になる重要な論点であると評者は理解する。その存在については首肯できるが、『華嚴經』講説の第四期の講師は智憬が、複師は澄叡・春福が務めるように、慈訓らのそれとは別のグループが存在した可能性があり、『研究会』なるものを含めた複数のグループの存在と講説の運営展開との関連性がやや

不明確である。その点、元興寺・大安寺・金鐘寺における各学統の趨勢、法藏教学への傾倒、講説の展開など、それぞれの問題と「研究会」の動向が如何にリンクするのかも課題として残る。「研究会」を核に種々の論点を通した体系的な枠組みについて、何らかの見通しがほしいところである。

(2) 政治権力と仏事行為

淳仁・称徳朝における俗権による仏教施策の実態とその意義は、これまでにも著者が取り組んできたテーマの一つである。第五章での、藤原仲麻呂による『金剛般若經』の大量書写の背景に関する指摘は、仏典や人物の唐での動向にまで考察が及んでおり、説得力に富んだ論証となっている。また第六章の、政柄分担期における孝謙・道鏡派の三昧經典使用に関する指摘は、經典の奉請状況だけではなく当事者による奉請の際の經録利用の実態までが吟味されており、方法論としても学ぶべき点が多い。

付言するなら、これらの論点と少なからず関係する事柄として、当該期の大規模な施策である景雲一切經の勘經事業がある。この事業について、通説となつてゐる栄原説の問題点が近年指摘されており、関連する第六章及び付論⁽⁶⁾は、結論⁽⁷⁾は大きく影響しないが部分的な見直しが必要である。近年の

指摘によれば、勘經作業は内裏で行われていたのではなく、天平神護元年になつてから奉写御執經所で開始された可能性が高いようである。このため、同元年正月までに御執經所が内裏からの意向を受けて經卷を奉請している例は、ほとんどが景雲一切經とは無関係の使用目的であつたことになる。すなわち、政柄分担期における政治性を持った仏事行為は三昧經典から読み取れる事例だけではなく、この奉請文書群から他にも多く見出せる余地があるのである。したがつて、他の事例の目的や相互関係なども検討した上で総合的に評価する必要があろう。また、天平神護元年三月頃より孝謙の居所としての「内裏」と御執經所との関係に変化があつたと想定する必要もなくなつてくる可能性がある。「内裏」＝法華寺説に対する批判も含め、再検討する余地はあるう。

著者も述べるように、孝謙は内乱鎮圧によって仏の加護への希求と自身の正当性への確信を深めたはずであり、政治と仏教の関係を理解する上では称徳重祚以降の仏事行為も重要な検討材料となる。これらも含め、上記のような指摘を踏まえた議論の進展が望まれる。

(3) 貴族層の仏教信仰の諸相

文室淨三・淡海三船・石上宅嗣は、奈良朝貴族官人であり

仏家でもあつた人物としてよく知られ、彼らの信仰・當為は俗界における仏教受容のあり方を見る上で重要である。本書

では、この三人の仏教信仰の内実により深く迫つており、推測に頼る側面は多いものの、史料批判が適宜なされている点、頷ける部分は少なくない。

しかし、いざれも個人的信仰としての評価にとどまり、当時の信仰としてどれほど特殊なものであるかなど、他の類似した事例との比較が全くなされていない点が惜しまれる。むしろ、ここで取り上げた三者の信仰は極めて特殊なケースであつたといわざるをえず、彼らの信仰や當為の歴史的な意義があまり見えてこないのである。個々人の事例の特殊性を指摘することも、その時代の信仰の実態をより深く理解することに繋がるが、個別の信仰形態の基調をある程度広く見わたすことが、信仰史的意義を明確にする上で必須であると考える。

など、三船の場合と比較して共通点・相違点を追究することは不可欠ではなかつたか。

また、文室淨三の無勝淨土信仰（第八章）に『涅槃經』の影響は十分認められるが、実践面における『大乘起信論』の影響についてはやや論証しきれていない感がある。この書は、確かに撰論・涅槃宗と関わりが深い書であるが、淨三が元興寺や禅院との関係の中で両宗による影響を受けっていたというのは推測の域を出ず、『大乘起信論』の内容の一部と淨三が学んだ可能性がある禅とが共通するという点も根拠としては薄弱である。さらに、阿弥陀淨土は見えるが無勝淨土は見えない『大乘起信論』をなぜ淨三が依用したのかの説明も要るであろう。このように、淨三の『涅槃經』信仰と『大乘起信論』に説かれる修行実践法とは、必ずしも結びつかないようと思われる。

『涅槃經』『大乘起信論』『維摩經』など、彼ら貴族層の信仰に大きな影響を与えたという仏典が奈良時代に如何に使用されたのか、その書写状況などを正倉院文書から逐一検証することも一つの重要な方法である。これによつて、ある信仰形態の普及の度合いや特異性などが分かり、信仰史的位置づけもある程度明確になつてくるはずである。著者の業績や学識からすればこのような提言は無用であろうが、かかる方法

に基づいた言及を今後期待したい。

四

古代佛教史研究は、奈良時代を中心として、政治と佛教のあり方や在地社会への佛教普及の実態など、これまで明らかにされた事柄は枚挙に遑がないほどの蓄積がある。その中で目下の課題となっているのは、当時の皇族・貴族や僧尼さらには下級官人へ至るまで、佛教に傾倒あるいは携わった人々が、階層による差異があるとはいっても、どの程度まで教理内容を理解し、如何なる修行法を実践していたのか、ということである。本書はまさにこの問題に取り組んだものである。

歴史学の手法では、多彩な史料を駆使して斬新な歴史像を描くとしても、厳密な史料批判を経ているか、また先行研究によって構築された歴史像に照らして整合性があるか、という点に十分留意する必要がある。古代史の場合は史料が乏しいため、大陸からの影響を考慮して隋・唐での事情から類推したり、後の日本での実態から遷及的に考えてみたりすることもある程度仕方のないことではある。しかし思想や信仰を扱う際、とくに注意を要するのは、中国や後の日本で体系化された思想・教学に通じるものがあるとしても、佛教界の実情や研究水準も違い、宗教へ依存する政治や社会の様相も異

なる古代の日本では、その教理理解や信仰の実態を同様に考えることはできない点である。実際のところ、奈良時代の信仰を扱った研究に、このような問題を考慮しないまま飛躍しそぎた史料解釈を行い、先学の成果を安易に扱つて恣意的な見解を述べるものも見受けられる。このような慘状に陥りやすいテーマであるからこそ、内実が不明な奈良時代の思想や信仰面への言及はとくに慎重であるべきと評者は考える。

本書の場合、推測が多い点は否めないが、不用意な言及は極力避けられ、史料の扱いや遷及的推測などにも慎重であり、著者の堅実な研究態度が窺われる。しかも、正当な手続きを経た行論だけでなく、佛教教学・信仰の内実をあらゆる側面から論究し、充実した奈良時代佛教史像を描いて見せている。評者はとくに、大部の仏典群の分析方法や經録利用の実態を検討対象にするなど、当時の佛教事情を知るための新たな系口を得たことに大きな意味を感じた。本書で明らかにされた事実や新たな分析方法への指針は、古代佛教史像のさらなる深化に大きく寄与するであろう。

以上、評者の浅見による紹介と批評を縷々述べてきた。不適格かつ乱雑な論評になつた点、著者及び読者に御宥恕を乞う。

註

- (1) 本章に関連する著者の論考として、「天平宝字二年の御願経書写」(前著第一章)がある。
- (2) 宮崎健司「天平宝字二年の写經」(同氏『日本古代の写經と社会』) 塙書房、二〇〇六年、初出一九八九・九一年)。
- (3) 本章に関する著者の論考として、「天平宝字六年(八年)の御願経書写」(前著第三章)、「奉写御執経所・奉写一切経司関係文書の検討——伝來の経緯をめぐって——」(相愛大学研究論集)二〇巻、二〇〇四年)がある。
- (4) 中林隆之「日本古代国家の佛教編成」(塙書房、二〇〇七年)など。
- (5) 山下有美「東大寺の花嚴衆と六宗——古代寺院社会試論——」(正倉院文書研究)8、二〇〇一年)。
- (6) 栗原永遠男「内裏における勘経事業——景雲経と奉写御執経所藏藏・奉写一切経司——」(同氏『奈良時代の写經と内裏』) 塙書房、二〇〇〇年、初出一九九五年)。
- (7) 内田敦士「景雲一切経の写経・勘経事業と称徳・道鏡政权」(続日本紀研究)三九九号、二〇一二年)。
- (8) 西本昌弘「孝謙・称徳天皇の西宮と宝幢遺構」(同氏『日本古代の王宮と儀礼』) 塙書房、二〇〇八年、初出二〇〇四年)。

(大谷大学非常勤講師　おおくさ　ひろし)